

「白雪姫」

狩人は女王の命令にしたがって、白雪姫を森の中へつれていきました。狩人が、鹿を切る大きな刀で白雪姫を殺そうとすると、白雪姫は泣きだして、

「おねがいです、狩人さん。命だけは助けてください。わたしは森のおくへ逃げていって、けっしてお城へは帰りませんから」といいました。狩人は白雪姫をかわいそうに思っ、「それじゃ逃げていきな、かわいそうなお姫さま」といいました。狩人は、じきにおそろしいけものが、姫を食べてしまおうだろうと思いました。それでも、自分で姫を殺さなくてすんだので、ほっとしました。

ちょうどそこへいのししの子がかけてきたので、狩人はそれを殺し、肺と肝臓を取りだして、それを証拠として、女王のところへ持ち帰りました。女王はよろこんで、すぐにそれを塩ゆでにさせ、ぺろりとたいらげて、これで白雪姫はいなくなったと思いました。

『語るためのグリム童話3』小澤俊夫監訳／小峰書店

狩人は、白雪姫をころさないですんだのでほっとしますが、女王のもとに白雪姫の肺と肝臓をもって帰らねばなりません。その状況下で、うまい具合にいのししが走ってきます。狩人は、いのししを白雪姫の身代わりにすることができました。

「かたつむり」

むかし、あるところに、おじいさんとおばあさんがいました。ふたりには子どもがいま sensen でした。それで、いつも子どもがほしいと思っていました。

あるとき、おじいさんが山へ木を切りに行くと、かわいらしいかたつむりが木の幹にくつついていました。おじいさんは、

「これはわしがさずかった子だ」といって、よろこんでうちにつれて帰りました。

おじいさんとおばあさんは、かたつむりをだいじに育てました。かたつむりはだんだん大きくなりました。

語りの森HP 《日本の昔話》

子どもがほしいと願っていると、子どもが授かります。この状況の一致は、昔話によくあるパターンですね。「瓜子姫」「ももたろう」「一寸法師」。グリム童話「七羽のガラス」では、男の子が七人いて、女の子がほしいと思っていたら、女の子が生まれます。

「閻魔さまの失敗」

三人はしかたなく、そろって三途の川をわたり、地獄の二丁目へやってきました。そこには青鬼と赤鬼がいて、大きな釜にぐらぐらお湯をわかしていました。そして三人を釜の中にはうりこもうとしました。軽わざ師と医者がかかるっていると、神主が、

「心配するな。おれがおまじないで、湯をぬるくしてやるから」と、なにやら口の中でぶつぶつとなえました。またたくまにお湯はぬるくなり、三人は、

「ああ、いい湯だ、いい湯だ」といって、ゆっくりお湯につかりました。

鬼どもは、負けまいとして、どんどん火をたきました。お湯はちつとも熱くなりません。鬼どもはすっかり腹をたて、三人をまた、えんまさまの前につれていきました。えんまさまは、

「よし、それなら剣の山へつれていけ」と、命じました。

三人は、鬼どもにつれられて、地獄の三丁目に行きました。医者と神主が、剣の山をみてまっさおになっていると、軽わざ師が、

「心配するな。ふたりともおれの肩にのれ」といいました。ふたりが肩にのると、軽わざ師は、すいすいと剣の山をこえていきました。これを見た鬼どもは腹をたて、三人をまた、えんまさまの前につれていきました。えんまさまは、おっかない顔をして三人をにらみつけていましたが、

「きさまら、どうするかみている」と、さげんだかと思うと、ぐーうつと息をすいこみましました。あつというまに、軽わざ師がえんまさまの口の中にすいこまれていきました。えんまさまがもういちど、ぐーうつと息をすいこむと、こんどは神主がすいこまれていきました。さいごにえんまさまが、ぐーうつと大きく息をすいこむと、こんどは医者がすいこまれていきました。

こうして、えんまさまの腹の中にすいこまれた軽わざ師と神主は、こんどこそ助からな

いと思つて、おいおい泣きだしました。すると医者が、自信たつぷりに、

「泣くな、泣くな。こんどはおれにまかせろ」といって、南蛮の膏薬を、べたりぺたりとえんまさまの腹の中にはりつけました。

えんまさまが、「苦しい、苦しい」とさげんで、「うん」と、りきんだひょうしに、軽わざ師が、えんまさまの口からびよんととびだしました。

『日本の昔話①』小澤俊夫再話／福音館書店

神主と、軽業師と、医者、なかよしの三人が、たまたま同じ時に亡くなりました。時間の一致ですね。が、この引用部分では、釜に放りこまれることになると、神主が得意の呪文を使います。剣の山では、軽業師が他の二人を肩にのせて山を越えます。地獄の罰を逃れる方法が、三人それぞれの職業の特性と一致しています。